

祈りとの出会い

『はじめての祈り』

ウイリアム・バークレー 吉田信夫 訳 日本基督教団出版局

聖光学院高等学校 神山 翔

人間は祈る生き物だと私は思う。人間誰しも人生で一度は祈ったことがあるはずだ。人間が祈るときというのは、大抵感謝や願い事、困難を乗り越えるためや決断を助けてもらうためといったなんらかの意図がある。これらは一般的に誰かに教えられて身に付くものではない。いつのまにか祈るといふことを知っていて、いつのまにか行動に移っている。私も高校に入学するまではそうであった。まだ幼かった私は、自然と祈るといふ行為をしていた。明日は、お父さんとキャッチボールをする約束をしたから、晴れますようにとかかって言つて、小さい時から祈っていた。こんなちっぴけなことだけどこれも祈りだ。私は野球をやっているため、よくプロ野球をテレビで見ろのだが、外国人選手がホームランを打った後に空に向かって人差し指を指すパフォーマンスを目にする。これも感謝が込められた祈りである。祈りというのは、人間が自然に編み出してきた普遍的な習慣なのだ。

祈りのなかにもたくさん種類が存在する。神仏や超越的な存在に向けて願いや感謝を表す宗教的な祈りや未来への希望、不安の整理、心の落ち着きを得るための心理的な祈り、誰かの健康や安全を願う時、人と人とを繋ぐ社会的な祈り、世界に対して「こうあってほしい」と姿勢を示す哲学的な祈りなど様々である。日本人の多くは、心理的、社会的、哲学的な祈りが大半を占めるだろう。私は高校に入って宗教的な祈りに出会った。

私は、キリスト教の高校に入学した。私の学校にはお祈りを捧げる礼拝の間が存在する。学校に登校して私たちは毎朝お祈りをしているのだ。これは決して当たり前なことではない。もし私が他の高校に行っていたら、毎朝お祈りをすることはなかっただろう。今では毎朝の礼拝が当たり前となっているが、中学生の頃の自分だったら全く考えられないことだ。きつと中学生の私だったら毎朝そんなのめんどくさそうって思っていただろう。でもやってみるといいことだって気付かされる。今日と言う一日を神様に見守られながら事故なく安全に過ごせるようにと祈る。こんな素晴らしいことはない。今日も一日頑張ろうって思える、そんな時間である。私は学校で神様に祈っているのだ。

幼かった頃の祈りとは少し違うが、私は人生で何度も祈っているんだ。そんな毎日を過ごすなかで、毎日耳にする言葉がある。「アーメン」という言葉だ。最初に聞いたときはラーメンとかって言ってバカにしていたけど、このアーメンという言葉には素敵な意味が込められているのだ。アーメンはヘブライ語で「まことに、真実に」を語源とする言葉でキリスト教の礼拝やお祈りの終わりに唱えられ「本当にそうだ」「そうなりますように」という賛意や同意を示す言葉だ。イエス・キリストが大切なことを強調する際にも使われ、神の約束への信頼を表明するお祈りの最後に言う信頼を表す言葉なのだ。

私たちの学校には、聖書の授業がある。聖書の内容であったり、イエス・キリストの話、キリスト教について学ぶ時間だ。その授業を受けていくと私は、キリスト教への興味がどんどん湧いていったのだ。そんなときに、ふと図書室で手に取った一冊が、『はじめの祈り』という本であった。この本の著者は、ウィリアム・バークレーさんでキリスト教の信者なら誰しもが知っている人だと聞いた。

この本には、バークレーさんの祈りに対する想いがつづられている。印象的だったのは、バークレーさんが祈りを「不安や弱さの中で発せられる正直な言葉」として描いている点だ。祈りというと玄派で輝かしい言葉を並べるものだというイメージを持つ人が多いが、この本に収められた祈りの多くは、驚くほど素朴であった。「助けてください」「感謝します」といった簡潔な表現こそが、中心となっている。その正直さに触れると、祈りは人間が取り繕うことなく自分を差し出す場なのだと言付かされる。祈りというのは、人が弱さを自覚したとき自然に湧き出る声なのだ。

私はこの本を通して祈りは行為であると同時に習慣であるということを知った。祈りを重ねることで次第に心が整っていく。祈りは即効薬ではなく、長い時間をかけて効いてくる「ゆるやかな力」なのだ。現代の人々が抱えるのは、忙しさや孤独、将来への不安といった漠然とした重荷だろう。祈りはそれをすぐに取り除いてくれるわけではないが、重荷を抱えながら歩むための姿勢を与えてくれる。この本を読んで私は祈りを「問題の解決手段」ではなく、「生き方の支え」として受け止めるようになった。祈りはただの儀式ではなく、私たちの生活の中での小さく芽生える思いなのである。

今後歩いていく人生の中で、あらゆる困難にぶつかれることも少なくはないだろう。そんなとき私の小さな祈りがかけがえのないものとなるはずだ。